13
939
5 ~~00~~

門イ 13
930
80

朝夷巡嶋記全傳巻之五

東都　曲亭主人編輯

天保三壬辰年二月
花房仙次郎氏寄贈

初輯第九

朝霧乃庄司暇
夕立　許我郷

阿三郎ホゴ住ひなる大磯の浅江より。船堀圖内ゴ宿所まゴ。十八九町ゴ程ヨ
ちゝく中間ヨ庄司暇あり。大磯ハ和名鈔。國郡の部ヨ見えて。朝夷郡ホあり。
今ハ定ラるゝねゆや地名ホ今昔の差別あり。道路も又ちゝたゞべ〜今或ハ
推きのゝハ舷ヨ刻る類といふまゝ。ゆゝく〜殃阿三郎ハ母親と一三ホうち
ちゝせ〜ゞ今ハ〜も後世ヨ千日菴へ入死て志ゴ施仏を營べ死欲眼代ゴ宅地へ
いゆゝく。船堀ホを營べ死欲と且く門傍ヨ立在ヨ又つゝくとゆふ。緯の
起ラまハ沈仏るヨ。ゴ。ハの枉死ハ船堀ゴ殘酷の筆楚ホよりヨ。ゆヨハ目ざし

敵なる圖内を殺さず後ふたゝび泡仏よ怨敵復人。ちゝうまく。と肚裏ふ尋思しつ。
瞻仰まゝ若ふ山梢ちなまゝく さゝ弁慶北日麦中の月の暈。さゝくゆくへ聚
道おちうえの鳴く杜鵑冥土と婆婆の二親をうけてぞ懲む神仏の冥助利益と
祈念しく。歩の運び残いそゞせば庄司聚残えや過て讐の宅地ふ近つゝへ築垣ふ
分を倚て内のぞう残窺ふる門率ハ寝どやあるけん。窓の隙よりゝ火光漏て折こ
うちうゝ見る是さえ憎しゝ思潜入る隙を求めく背へ遠りく竊ゆび後堂ひと
ゝ感べし。筑紫琴の声ゝ幽ふしく 蛬りよ人の笑ふ声ゝ聞ゝ時ゝ早ゝ
けゝ。ふふ怪しゝ思ゝ且く退ゝく更ふ残ゝ。と浅江のかゝ五
六町立ゝ前面よゝ里人とゝ死ゝ西三人ゝ立ゝ。ち相頭ふ ふれば
ゝ残怨ゝ思ふのゆゝと思ゝ只一條ゝ縄なゝ避ふゝ。ゝ
忙ゝ久ゝ道次ゝ片扉ゝ堂ゝ堂あゝけゝ。

且くゝと支ゝ躯ゝく路ゝ人残遣ゝふ彼ハ浅江のこゝ深澤乃荘
客ゝゝこの日眼代の夫役ゝ夜ゝ迫ゝ人跡ハ漸ふ
絶ゝ。ゝ後り残ゝ思ゝ時ゝ
よゝ本尊ハ石の不動ゝ。そゝ阿三郎ゝ年来日来ゝ。
この明王の仏ハ幾遍となく過ゝ有繋ふ企ゝ。
ゝ若ゝゝ故ゝ今霄ハふ立ゝ
仇人を狙ゝ不動ハ釈如ゝ大日ゝ日ハ陽徳の
毋ふ萬物ゝふふゝ成就ゝ降魔の利劍薄の索像見の刃も倶利迦羅九
祢とのひ恰とのひとの明王の擁護ゝ仇を撃ゝ或ハふ原ゝの石
像ハ日本武尊ゝ右ふ採ゝ世ふ刃ハ草薙の剣ゝ左ふ拯ゝ世ふ刃ハ列来縄ゝ
この尊東征ゝく駿河四まゝく平ゝ世ゝ暴夷ゝ狩ゝ假托ゝて法ゝ。

叢に火を放て火攻にとりこめ尊は腰なる燧をとりて火を焼つけて十束の御剣を引抜て草を薙ひらへばその火は仇のうしろに移りて夷どもを焼殺さる。因て件の宝剣を草薙と名つけ給へり。この時の御姿をうつし奉り上総国に祭る。櫛媛の神ゐむくに。この神祠を建しゐ神體不動なる仏させ給ひて彼本地を問大日と日本武の日と相応ずるゆへ本地垂跡の義をもつて今に不動と唱るとのたまへり。満禄寺に有しと云師の夜話に曰く。日本武は弓箭の祖これ亦武門の守護神なり。神仏その義は異なれども同じ事なれば今はこの宜助の外普ひ〜ゐひく輒く仇を報せ給へと丹精を抽て祈念ゐ時をうつさずゐ遠寺乃隆声幽に告給へく。汝子の時なるべしと。外面へ走り出給へ。いつの程ゐ夫結除さ。月の境もうすくなるべらよく仮宜を為さりけるとかくて又船堀が門前へいたりくらに更ゆくまゐ琴の音かすかにうるよく笑語の声絶る時ろ〜この侭ろ〜と夜を明さゐ。再て志のひよると難いつくせ迚。とかりひ明ゐ。あまろ頓て早くとも今さらく紛ろくべ暗死ゐ身を屋〜く仇の睡を我供こと迚。浩然と世渡ろ夜とく更て由断せず長櫃を一荷よりて燈火さへ引提へ声よく呼さる商人が蕎麦売めさるべや問酒もひと呼けつ眼代ゐ宅地の辺を過ると。門来ハ寛の戸を細ゆ引開く。こやくと召るゐ。常に紙ハら鼓せ給ひ二度あまり過ぎて。なのゐ声ろるけるべ。ろ問ゐ燈火も鳥夜の蛍と遠離るべ。さろくこのをとこ焦燥て。彼耳ろ〜奴ゐ今宵幽ゐ寂く豈沽る酒飲こ罵つ。嬢をやありん。振戸を半遠く推開て。身と横ざまに倒れ出る様子ことうろろ〜ゐら。一町ばかり追蒐さり。阿三郎ハこの光景ゐ。そらぶも隙を窺く神明仏陀の冥助ゐとさろろ〜祝〜く。件の奴隷ゐ遣りゐ〜つ潜ひ入るゐ前面ハ大注所なるべ。障子の内に鮮明の燈火の光をゐ左ものろろハ庖湯とおぼ〜。折続ろ〜

こゝは板屏にて隔てたる奥へは遠からねば、さしもなく足音潜めて右手へ進み果せたる。柴垣あるに折戸あり。この所庭門なり。潜りの戸押し開ける声に際ちかく寄りて折戸を推さんと窺ひ見れば、庭には池あり、樹立深く、書院とおぼしき軒下に添ひて言ひける。かく隠びよりては便室なる雨戸西三枚開けるうちに障子ありて人影して主従まさに八九人にて酔ひたる声ざわめくに、夜はまだ更けず、婢ども盃盤をとり納めよ。又妾の童に起きて琴を踏折るなといひつゝあるじ図内は阿三郎の縁類ちなみ。羅漢杉の間より隠れて内の事共窺へば、婢们は許されて寝所へ退りぬとおぼし。扨は図内は餘興尽くるやあらん。五六人円坐して打ち譚ふ威つかく焚けば、図内が家子鞍堀小頓太、その弟鞍堀小珎、二十日庵の女僧純仏、私卒切平、決め主従もべて六人あるは。当下図内は鞠居して扇拍子とるまゝら謝称我謳ひも統きて、呵てとうち笑ひ、純仏は何とせし浅江の豊六を結果て汝ら怒を積して討兼

妙なる汲や我には威勢めく憎しき奴なりとも、罪なくて殺されば苦労と甘く詐計て盗賊よ来て云へば、汝がなるまじとも、われ私の沙汰とせでさまへ。今宵の吉酒これぞ子小頓太が誕辰を兼て汝を寿ぎなりとゆるく楽むなるなし。珍しくもなきやといへば、純仏うち笑て寔に刀祢の瑕疵に因てかゝるを是剛く口強なる仇を報ひ恥を雪めし悦びは主の為に述たるとも唱して仁喃切平他にも及ぶなども必他なる事ひそといふ。これぞ子をつれて其宜へまで日此から年来母を安楽に養ひまゐり、某さへに威徳つれて荘客们まで我さげらるも元は大刀祢の御恩なり。加旃新参の決めを言へば某が是でも上総にありしと見ゆ。竹馬の友ぞといへば、ちる此刀祢に請はれて、こゝに我御内へまゐる世。無双の手ありせに彼使者を来り、浅からず遠愛されしを賤なりといふまゝ決為誇自に新参の事あるまじとも、切平が友よの見えとて泣とゝる如くせずとも。

ゑぶ
ゆへいまぐ莊客ども面を識るものあるふ孫べ。この密討我行せん。箇樣ここに申せよ
うーと示させのふまちろ我ゐるく。平群萍平と名告つ。豊六が宿所へ勢兄とゆう
かう申う就ーこと。吁コヨとうぐうよく者さり。と鼻鳴呼わうせべ死仏ゐ。ゆゑ申べ
嘆息ー。者ア之とのへど田今夏ゆ。さろふかうゐ豊六が妻とその子ハ差なくく。
間ちろ兄浅江村よあるとカ称ぢ者ふせのわぢや彼豊六ガ一子ハその後我門三
とう鳴るえ年ろ月十六七ろ五とも。身長ハ六尺ぞうと筋骨の逞ーげなり。
相撲とりとものひうべ兄大童ゆなん伯るヒ這奴ハ一尼といく怒ろく葬を
鬧をのあべ月そとろゆハ御ぢぐー。とろべ後ゆとうびさとて葬へ還ら
ぢふいろ逆ろさろのくよ伯ふん。よく計せのひねといふよ小頭太小珠二ハ小勝我
敷くうちゆ笑ひ死仏ゆ卿ゆまーく。頑童ゆとろ我おそろとろゆと五ろのうゆを
ことゞ大人ゞ豫ゆうと慮ア者く。竊ゆ人我遣ーく。彼大童と向せのふゆ這奴ハ武蔵の

かさへいゆ兄て五六日ゆるとゆのかへアとゆべ竊ゆ告よゆと村長ゆ命じのべ捕捕
ろ逆ろ兄親ゆ兄とゆ兄盗賊の科我負ーく獄舎ゆ繋ぎべ捻り殺ともいと易ろま。
と暴ふ五く頭我原来根我剛ア我枝ヒ後の患我除んとゆ者を計せのゆ人ゆ
けアゆくまで御庇を蒙るとゆ。襁褓の中よるゆ和子達ゆ乳をゆるゆ世餘波ゆ兄。
さよゆ兄尼ゆ幸えとゆひく笑ハ顔の皺。そとろよゆ我推ー。圓ろ目を細く
者く。我ゆ者ゆ者ゆしさ現ゆ畏の乳母優婆夷ゆ昔の餘波ゆり所
三郎ハ者ゆ者ゆ母ゆ姦計一五一十を告く。我ハ怒りつ我ぢ壮裏ゆ
中。國内我怒とゆ死仏ゆ漏さ遺恨ゆるべ兄ゆ今宵の圓居ハ尼のくゆゆ
彼切平ハ父ゆ責殺ーゆる癖者ゆアゆ又決ゆとゆく奴ハ。母我統計て
銭を贈ゆ。年ゆ兄ハ内ゆ子ども。小頭太小珠二ゆ

冥助なるべしと。縄をのろ式遣ひ。刀の鞘式濕ひとて。
きゝぬ佛の名を唱へ。念仏八ヶ度。この比の夜の短さ。丑三ヶ時も過つゝ。
の杖へ假寝あさぶと狩臥房へ入らせ。仏祖といふる國内八起ち居り。あるゝ愉く
酔ゆゝ子どもらとなるべく寝よ。みるゝ体めと服掃の刀を取て立ちあがる。
前面の障子を蹴ふ破て跳入る阿三郎。主殺齊一驚とて。ものゝ狼藉なる。
何ものぞ不覚ゝ余を捨ゝ不つる半熟の偷児るゝ。といわせも果ぞ佶と疾視奸
賊ども。立るさ丑ぞ酷吏八虎よ丑暴一とゝ。古人の言素誠ゝ故あ丑罪なう
きゝ獄舎ゝ繋れ根法の呵責ゝ命式預せ。豊六ぶ中ゝ八子阿三郎式識ざるや。
人式指て賊といふ汝ぞ民を掠ゝ仏を責て施物式促を田頂衣冠の偷児ゝ丑
丑五七日旅寝て立ゝ居舊里の親の枉死八女僧弛仏と眼代國内ゝ毒
悪の謀ゝなる丑ぞ。ゝ要時も怪ざ丑べ。ゝ式報んとて。潜び入りて

彼ゝ丑ぞ汝ゝ問ぞゝ。伎倆八ぞべて。ゝ悪ゝ彼も此も晩さんや。國ゝ為ゝ好式
ゝ親ゝ為ゝ雙式刎ゝ刃を受よと罵丑八國内八子共と切平ゝ同式注て冷
笑ひ土百姓の子の分際ゝ威徳領主ゝ丑吾倍式。仇とて寛ゝ蜡蝋ゝ斧
ゝ車ゝむゝふゝ如。ゝ丑ぞ丑嗚呼ゝ為白物ゝ腮さゝ式ぞ丑と合ゝ殺ゝ
切平決ゝ組とゝ式引つゝて。両ゝ衿上撥砥ゝ一反ゝ丑ぞ投退ゝ丑ゝ件の二
人八碟ゝ打丑て。要時八起ゝ為ゝ古式捧て進ゝ
ゝ頻ゝ人式ゝ式ゝ阿三郎八憤怒と瞋利迦羅の刀引抜て國内と目ゝ付て
ゝ阿ゝ勢ゝ當ゝ丑ぞ丑ぞ。有繋ゝ親を捨ゝ式て。小頓ゝ小坪二遽て。
ゝ式嘗琴式宿ゝ。遊り留めゝ。ゝ丑ぞ丑と接ゝ式両ゝ合戦ゝ
ゝ。ゝ式國内ゝ子共ゝ式ゝ刀ゝ式ゝ力ゝ式ゝ斬ゝ式ゝ制ゝ奮ゝ戦ゝ

石火と閃き刀尖を拄ち絡ら居る蕨堀親子は小鬢肩先浅痍四五个処負ぬ虫すなや
受大刀ゑスのりとしらへ逃迷ひさる鈍仏ゟ脱きまて乞ひん阿三郎ゟ後方のさ矢
庭の陘ゝ組著く弯倒さんと走りましどを野戸ゟ立る老松を抱とる坐すりの
光く動きとことをかうなけへ放て逃んとせる捨ゝ阿三郎ハ足然飛ーて後ざ曲ゝ
碳と蹴る機らにて苦と叫びあへず鈍仏ハ班を居板歯と脱ー鼻と面がかて澤ぎと
流る衄血ハ煎蘇枋の樽滾く。箕子に惨香ゝ異ならず親子ハいよく大刀をもち
乱きて邏巡るを居のすうらへ阿三郎ハ猛虎を駈て群羊を逐ふごく頓すゝ進ぐ
小頓太をだうつとどんと斫仆し。次を刀ゟ図内が眉間を刀尖ふく丁と斫る炎
斫るる天霎時もゐ坊ぐ尻居ゟ摚と倒る然足下ゟ楚と踉蹡て立驚き劇る
小珎二が刀と真て哩と敲落ーて左る然伸ー搔側と矢声をかけて投ーがへ小珎二ハ
筋断て柱ゟ趺然うち碎る腦液出て死てけり又彼切平决放ハ大力ゝ投ぐらさて。

一旦息ハ絶ゝまでもし乎ーて痛死なるぞあとゑゝしり卒ゟなへ居ゐちら五郎こ痛を筋
縮て遂て逃べ竹もあらざりしハ陽滅ちてぞいりける阿三郎ハこのめのさ然尻目ゝ
かけて踏居と図内と些も動かせず引提ゐ血刀のくその頭然うち敲ち奸賊
天罰をひえらや。よゝ図郡ゝ主ゐめの是則民の父母之又その主ゟ代り居る
汝がゐれ民の為ゝ父母ともいふべきゝ賄賂然納ーて非法を行ひ公道を藉て。
私欲然恣ゝし。良民を虐げ。幸なき然殺を何ぞ民の依母なら侍べき白刃既ゟ
臨とすゝわーく猶遅ゝら居ぞ。背穴ハ養ゑ精灵も向然受く三熱の苦然断ゝらきを
散ーえ弥陀仏こゝと唱らく念ゝ居刀を閃し。頭を覆石ともち落せバ鈍仏ハ戦慄
立て。綱を贈ら立て居蜘蛛のごく手足然張て尻を高く慌忙て逃んとさる然
阿三郎ハ跳懸て項をち極て樸地と引きえ賊尼かくても死をおそ居ら縛の
起つ与没ゐあすと逃居とて脱んや善ゐハかなうらず善報ありて悪ゐハかならず悪

仇討
難を避る
庄司暁の
黎明
阿三郎
阿三郎が
復讐を圖り
既に第四の
巻に
出づ

報あらんと人殺せば又殺さる。輪廻応報のことわり汝が常にいとことろかなるべく
なるべくと罵る程に引起せば池仏八目も口も血ぬられ手を合し頃を縮め
刃を戦し哀しや大事許りてなべ申しなんといふ声と共に頭は落ちけりそば
隙は稍四段に逃る切平決死を遣りをるさま等と呼ぶ阿三郎が一声ぬ二人の
耳成串にて青萩ぬ塩を被せられどく。重ねて伏く動えるを耳を摑げ
再び逃んとせしを阿三郎八霹靂の落るごとく飛掛て木偶を抜引摑
ごく浸ざぬ投えさく国内が死骸の母とを推まえ切平汝八主の悪を資て
民の脂を絞りくるその刃の罪成顧ぬ仏を責て俗を悲せ母の隠慝ぬさろ八
なるつぐとさく私情を挾を事申るをこぶ又成倦まぐぬむじて竟ぬ獄舎ぬ
るいさる報ひいぬ速ぬ汝や父の苦痛を今ぬ必ずあらせんと敦圓あぐ刀を
内へとをとをほるく。右の腕をうち落し。汝且く苦痛を忍びくこぶせんかう成

ようとい人て殿と蹴倒せば鮮血濺と濆り。果酒の樽の吸口をうち拂ぬ異ぬ
共ぬ刃の下ぬ伏を決死へ魂抜ぐ驚るぐごく死せ母が如く。齒の根をあらぐ戦と声
高ぬ唱く神仏を只顧祈念をさるを阿三郎冷笑ひ神明仏陀八善ぬ與しく
極悪の人成濟ぬぐ三の期ぬ及く何成ぬ祈をる汝八主の密議を兼て平群萍平
とぬ假號しくこぶ成階をうち己が悪古又成跨貝ぬ口をしを成竊ぬ八
ぐ奴ぬあぐ主の黄泉の倶成しく。閻魔の廳を開せと罵を書くく頭をうち落し又
小玲三ぬ頭を刎く成戸を引をうち国内池仏ぬ共ぬ五ッの首級成をろく。
件の棚ぬ乗なぐ刀尖をのく傷の壁へ。

酷吏啖民其暴甚於狂狼然尚逃刑書賊尼
惑俗其妖類乎狐狸而弥見尊信父困茲枉
俎奴依此凋落雖怨懟斷腸無由告訴官遠

而民情不通觖望蹉跎耳。豈忍崇讐哉。憤然磨刀。報怨雪恥。俟罪於寒郷之外。官使不暁問誰。六頭當開口荅。淺江阿三郎。

と書つけつゝ、かくりたる刀をとりて。切平がさし招くに。いかに賊僕。さぞ殺さんとするやさらば暇をとらせんと。ひらりと躍て髻を抓て引揚よせて頭を打落し。是をも棚にならべおきつゝ夾右の脇を斬くに一刀の鮮血を推拭ひて。これを鞘に納れば燭蝋んとして忽地暗く。庵室のうちより鶏鳴ありて。やや暁になりたるに。此の度は母屋へ退く滴にあける便室の程にいたりて、ねぶりを覚す奴婢をとらへて。文注所のほとりまで引そひて。離堀が野臥兵ども。あまた在をかし、なりしかば阿三郎は、さらに親の仇人を殲しく縁頬を閑と飛ぶ走る衆門よりとびあまたの弾ねを初めとして角門の簷を踏みて断離く。門扉推開て出んとせしに門衛の兵士等が起てきたり、大きさの樫の棒にて挾む。癖者等と呼かけつゝ外面へ出るける阿三郎が退路をさへきりて打倒さんと閃くさま、棒を外して大地を撲せ又振あぐれば、衝とよりて棒を奪て向脛を拂へば奴隷へ躬を逆さまに門のほとりの大圏へ泥水飛して水と堕ある疼痛と蠢けば阿三郎は打笑て棒を圏へ投棄て甲夜に祈る不動堂のほとりまでかくれて堂内に進み入りて明王をふし拝み輙く仇を殺せしは威神力を謝しまゐらせて、今後の身の丹精祈禱地もなく、某の時をうかゞひ国のためにたつ人、功名遂て一郡の主とならせ給ふべし。遂にこの地を領させまゐらせんと祈るうちに堂宇が振動しけり。されば又さらに清めよしと見えぬるがやと誓ひて躬を起し出んとせしに。その跡を追蒐来つる離れ堀が野臥兵四五人不動堂の左右に伏て張ひを阿三郎が出るを待ちて、やがてあつと声かけて雄も雌もよりかゝりて組も組せず面々に飛かゝりて躬を沈して揮

解死抗戈奉る双方斉一凡る隨る落葉の如く一人八石の浄土盤一人八樟の伐株る
投つけられて骨碎け叫ひも為へぬ死ぐけるまさるを見ゆるものるまぎまる捕捕んと
隙を窺ふ勢を敵ふ阿三郎ぶ引抜く刀八明王の神威るいやまし俱利迦羅を戰
兵を傳の素朽て両人矢庭る砂倒さを殘るひとりまる源蔵と負て逃んとする
前面ゆる葉る弦送を著覺るけて也り来る一二八ゆり照らを焦火抗て佶と
て阿三郎欲と思て兵一三阿爺欲怪我者のふる。ゆるるを焦火を
日ゆ衛て衣の裾を折る投る迷ひ入て潜を脱人と成る戰兵をそぶ侵楚と
騎まえて毋れのて入いを易るを。成合ぶるとて逃をるを
奔を。といそぶ世ゆ天八生憎ゆ明烏反哺の孝ゆ母の子ゆ想像て阿三郎八この
恩人る一言の謝ゆ暇るへる道るぶ往方さを者る子の濱の津をして走去る
さ成ゆ阿三郎八去成と數十町豫て水行成ゆるるさて件の浦辺ゆ来るけるぶ。

辰の比及ゆるを上るど申まるて霜ふて。咫尺の間とるぶまべる成追ふものるを
おるる浦人ゆ朝霜の晴る成まちて舟を出さぶせんをべもなく彼此と津を求めて
東往さを成れば炉り成磯馴松る特ぶと見る成漁舟あるを。夜明して久世るや。
舟の中ゆ割籠あるを番の内るゆ雑魚も臣曲突る折焼く柴ゆまぶ煙りるのぶるる
湯る沸るて漁夫八四下るを。ぶ阿三郎八二れ申ひと遠しく纜引解て舟る
内るを成無る。棹を操る無ゆ。朝霜晴て順風る延帆揚て走らしつ。この
時いさく餓ぶ成べ件の割籠を拔て成る成る成。この些の飯あれべこれを盡て
餓ゆ充ぶ。曾楫ゆ取成隨る舟八細小るして東る追風ぶりけれべ。
その夫暮ゆ下愈る行徳の浦る成ぶ舟を乗乗て。その夜ゆ宿
屋ゆ宿を投め寝ぶ成ぶ来しる成ぶ。圖内を親乃
仇人ゆ成ぶ。郷の眼代ゆり去成を主従六人まぶ。蠱る成て走る成。

こゝ後難へどまれくまれ。こゝろこゝろへ母のこゝろ豫て往方を定めゞこゝ
別れこけまゞ何如こゝ立在。何國こゝ候て再會せん。さてゝ苦しき死ひとゝへ又彼恩
人一三阿爺敷こゝ是我延さんとて。圖内ゝ數兵我拵こゝ連係せゝ居こゝ
あくん。心苦しき死こゝろ。加以健田六人こゝ年來疎闊の罪我も勸解ゞ況や家の
艱こゝ。くゝろ迹濁を大儲の汀の雁の翅ゝも絶て別こ我告さゝ死ゞ苦しき死こゝ
ん。おゝあれども古の賢死人の言の葉こゝ六信れ信ゝ死又大切ハ細謹を。
ゝくりゝさこゝとあゝ。の命あり時あゝ表我ゝさゝんこゝ十鈞とゝく
一毫こゝ報んともいと易ゝり。大丈夫こゝるのゞ女こゝく扨我ゝゝんや。と表我激しゝて
さゝく結朝行德の宿を出こゝこの日ゝり。萬里の客とゝのゝとぬれゞも路費とゝく
ゝくもゝ。京漢倉ハ惘ありて分を立こゝ不便なり。泰衡既こゝ亡びゝこゝども。
ゝ陸奥のゝこゝこゝ威德こゝ死武士ハあれいゝゝくゝん。とゝひ決ゝく武義下

緒の封彊ある隅田河の上りゝすゝけこ。當下又ゝゝゝ曩ゝハ母の名代ゝ淺草
寺へ詣々觀世音こゝ祈ゝ。夢中の示現ハ今さゝこゝ靈驗ゝ。とのゝべゝゝを立ゝゝゝ又母のゝ
ゝゝびゝゝと河ゝ出こゝ。觀音堂へ參詣ゝ。ゝ早ゝゝゝ千束のゝゝゝゝゝゝ
夜と明ゝ。急ぬ旅も夏の日ゝ。ゝゝゝ長けゝゝゝ次の日ハ十三四里の路我ゝゝて許
我の鄉まゞ來ゝゝゝ日ハ暮ゝゝこゝ天結佐久立の雨さと降そゝぐゝゝ
論の崎ゝハゝゝ笠ゝゝ笠ゝゝ濡ゝ直と表ゝ程ゝゝゝ僑ゝ
白屋ゝゝけゝ。雉板と雜色ゝゝ。ゝ折戸ゝ鳴子を附ゝ。ゝゝゝ且ゝ慰ゝと
ゝゝゝのゝこゝこゝて呼門ゝゝゝ戸を推開ゝゝゝゝゝと音さゝゝ奥のゝこゝ人
ゝゝゝ。ゝゝゝゝゝゝ維と問ゝ河三郎ハ緣邊へ隻子をゝけゝ。艱難こゝゝゝハ陸
奥のゝこゝとて孰こゝ程ゝ旅こゝ裳も汚ゝゝ。ゝゝ兩こゝ追こゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ走こ

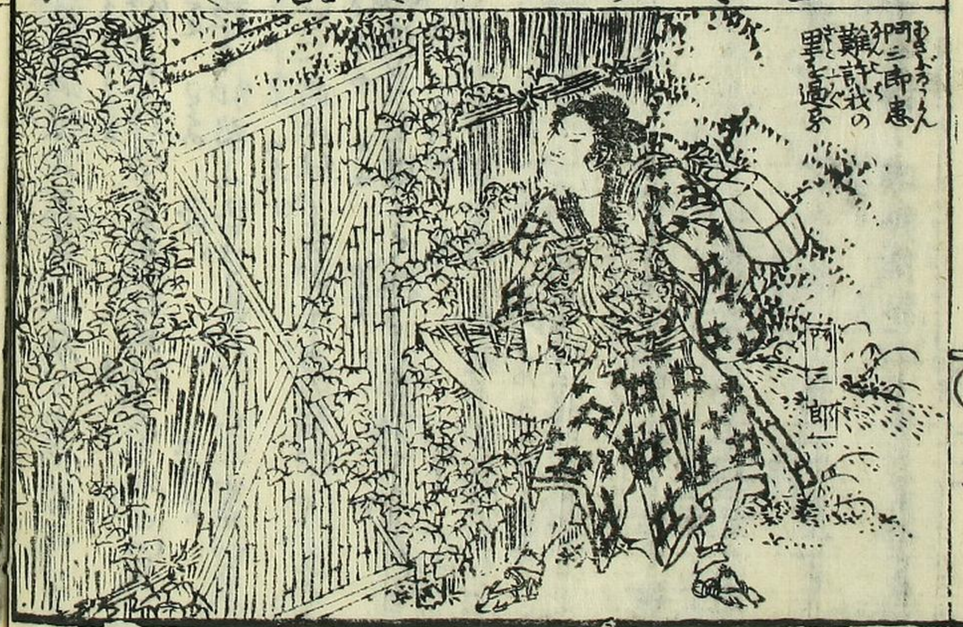
入まく驚しつる妾時簷下を貸たまへといふにあるじは起しさて不便なる
かなれ夜濡じぬるぞやとて内へ入りつゝ憩ひたまへといひつゝ障子を引あけさ。
迷ふ面影うちみるに阿三郎ならざる秋健田の大人秋とうちつぶやき
かけざとおもはぬ人ゆゑ疑ひは釋ざりけり。

初輯第十　旅宿のかりの元服
十八　石山の遺弓

却說健田秀作は阿三郎を勸めて草鞋を脫せ母屋に誘引ながら夾衣
とりまはせて濡たる衣と更させ又親切にもてなしければ阿三郎は涙ぐみ喜びて
さて疲労をおぼえざりけれど再會を祝して其満禄寺を
辞し去てより生活の暇なきのみならず身の賤しき且差つく武藝を
嗜なりしは親にも志らせざりしかど稽古の会は断ぬればなかなか

あら稼ぐも年来疎遠なりし師なる満禄に差ぬれば。と思ひはべりし
かかる故に彼地を去てより此よりまでの処に稽徳ひとつも聞なりと思ひ
秀作うちうなづき、さても左様なる稼ぎにも和歌に告ざりしと不審がり
ながら先君成駒に仕へ給ひし後は二君に仕へざると節なりとて
故明華の吹挙によりて朝光の女結城使者を遣して招きまつりしかど
きびしく辞しても主從の義を結びしより強て節義を折くみならざる師の礼を
かく扶持せんといふるに推辞ずて満禄の里人に別れを告て件の使者に伴ひて
結城の館へ赴きしは去歳の春弥生の下浣なり。さるに吾儕道中によりて脚
気を病ながらひとく結城まではゆかでさて宿りしその夜より命危く見
えしが懇に彼処に赴き駿馬の骨を売んより成らず死んと思ひ決めてやがて
かく旅舘に留まりて辞しく使者を返し嘴終に結ぶのこちなりけるべ

朝光ゆ〜もさまのごへとそく伊勢くへ招元
のうまど茶料ろと賜ふけれども若ぶふ医
療弧加ろふ金数いまゞ盡ざりけく妙て
春さ迄こ伏の夏果尚比ゆ也とて帝さく歩
行自由ゆろのまゝ迄ども官途ハ辞ろう
ぬふ結城へ赴くべくもゆよまどされども
満禄へふふ別弧告く生ろりの弧安屋
還ハ面ぶせえ只いろまでもこの里を元
どろゆびべ迄とろく人の古家弧購て
膝弧容さろまふ。ろびとれろゝ迄だ。
ゆとろゆゝまびいと易くゝ。たや暮日ふ



ろろゆゝり和殿ハ又何ふの故ふいとと
遠元陸奥へ今忙しく赴くゆゝんと同ひんく
冒根うちゆゝとれハ阿三郎ハ些も隠さゞ
又豊六ハ兎柱ゆ墓ゆく命を預せゝる。
母をゞ上総のゝ又落ゝゝゝ。ゝゝ悪ハ弧報ん
とく。仇人の宅地ゆ潜びゝり。鶴堀親子主
従弧。鏖ふゝく支ゆろゝ弧妻畑ふ苦
ゞ。秀作ゆゝく嘆賞ゝ。ゝゝとそのたゞ元
和殿弧相て。畎敢ゆ終尚人とハゝろゝど。
勇悍ゆゝろゝあゝ弧ろゝゞ言ゆ扱ゝく滅
果ゝゝゆる大義を就せゝ。ゝゝとゝゝの

仇を報じとて賞をたべ死のみぐらりその邪正を質ほかあらぶ非理の刀弑逆
吏ホ只あーざるホ判断しく和殿が推方を案ねるん且く隠しとく進退決定めるへ
と真成ま。愉しくもて倉蔵なるとめくくたや十日あまるま孫ホ有一日健田秀雄ハ
阿三郎ホ對ひている中。世を潜ぶゆハ貌と変名式更るホ也ことでも和殿を
十七歳額髪いと似げるーけるハ黄道吉日とるホ和殿のなるま元服の祝壽をまべ死
和殿復讐の為仇ハまれ眼前ゑるホあり孫と勇敢藝術両るぶら上達さるホあり
ざるませハ主後六人の勍敵を瞬息の間ま撃果さんや。加以十日あまりまつま同居
の動静高村義ホ成長ホ微賤の子ゆハ肖ざるまけり。和殿ハ實ホ豊ハ一子るらべ
泥ホ生ま濁ま深ぬ蓮の花沙石の中ゆまるん。めくハ愛ま死少年を武人ハ子ま
せざりしハ造物者の僻る狡ものが僻目狡いるホぞや。とうち戯まく問ひしーるべ阿三
郎ハ秀作がさとくも人式識るとの大るるぶぬま感佩しく忽地ホやるホ。師ハ

親のこゝろといより。況やまるべ信まるく吾と愛まるとの翁ホ何哀をろ隠さ死明く地ま
告ぐやと腹裏ホ尋思しく。ゆまるま扇を匂ホ把ま師ハ寛ま識量卓ー。某ホ親
あまくまあまま名告るも面るま死るまなるべ問るまとのるまるく。居果ハ罪ぶ
ぶるま。実父ハ後四位伊豫守。旭将軍式仲人実母ハ中三権亟兼遠ハ愛女世ホ
ゑ侍勇婦。鞆絵と某母の胎内ホあるまつるまるまハ討まく。和田義盛が子と
生変る。三才ホゆる侍まるく母のろ共鎌倉ホひしーるべ箇様ゑこのるホよりこ母親
鞆絵ハ母ホ伏ー。某ハ乳母ゆるる某ホ抱まく。そる舊里へ伴まま乳母夫婦を親ま
生まく。村義ま生月ハ実の親も又別ま養父あまとハ絶くゑくるべこれまゑるる
ざる侍初るま師ハいちまくく相ーるべく由緒ありねべくやるまて。問のるまと三遍ま
及べり聰察睿悟いくべくの人まおる識量ゆるハ言豈ゆるホ及んや感ざるホ
ゑるはあまるまあり。もるまハ此度の厄難ま後難をまるまる後親子ゑるまく

海陸よりの上洛をくんと強となる。とれ母葉さぶ真成ふ実母の遺言こそ云と出て素姓を
現示し。過去現在の親の記念この二種を遮与せしぶ慚愧後悔術なくまぐふ
憤激しく立地より。吉式改めて義を尽く勇べたぶ安吉くん養父の仇入城結んぎと
編ふ思ひ決るのくらさ。さりげなくもてなすくあぐそや母を行さ世この夜眠代結
堀ふ怨あるの式殺しく嬰裾より養子せ子(息)親のるよ取式雪めく志を致し
たりとしてく疑念式釋ふくとりしく躾く懐より旗絹をとり出し俱利迦羅の
太刀のろ共さなくべ置とて式せしべ秀郷類より嗟嘆しく席式更め礼儀正しく良
将勇士ハ亂るし。と世のハいくとも。ちくハあらぶ旗檀ハ二葉より芳しとと裏木ふ
秀乃鳶鳳ハ卵の中ようより。その声諸者ふ知るとあり見家のすぐめとるより田舎児より
似げるくとそくふ。和殿式年来研ぎ。疑念さつよ氷解せより木曽殿ハ清和十皇
別古今独歩の良将ん惜くる終ぎ式よくせより功ふ誇ぎく君臣の義を右ぎ狼藉

除限るるぎ式。兄ふ滅亡ちのひ式ひ。今その子孫ふと京鎌倉へ出のえるぶ渠
伐踵を旋さべうふぶ。譬ハ冠者義高(幼名)の如ち鎌倉殿の婿男ふの如ち
そどのろ
曽殿亡びふの後い程もなく式鄰ふ
義ふ
義式ちう後く挟ちく理非をもこうりとて。時運式ちうぶ。ものぶ勇悍血気ふ乗して。
治まる世式乱さんとふ。ふ四賊ん。ひて式義士とも勇者ともいうぶ。この頃式
分別せぐ。ぶとふを木曽ぶ為亂と。いひ誇さぶ禍の道式みぐうふ刑くん怒慎ん
ふくうふ彼養父義盛主ハ桓武の皇別坂東の八平氏の随一ふ。祖父三浦ふ義
明。鎌倉殿のもんぶふ。孝命を擲ちこ。高世りくく人のるところ。その忠信を兼嗣ハ
子もふ孫も航ちう。なく鎌倉殿ふ仕まる軍功も亦莫大ふ。ぶ義盛ハ
ちう左衛門尉ふ補せふ。ちく侍所の別當ふ。ぶ式親ちくさぐうひぶ被を
君ちく不義ふ。ぶ今ちそ。ふくあぶぬとも。時を待ぶ推ふしく。義盛ハふ再

會ー義氏と会うまの人と叮嚀ふ諭さるなん阿三郎うちなくいとまを乞く感謝ま
姫ぎ。実の母が遺言もこのうのふいに実父のうえ八一生涯口外まべうもひろぎ三年の
疎遠弑給ふはぎ後難とも憚らく愛あるまませめ八ろ尚師ゆ八何でふ隠さべ兒。
とぞひろのぎ恥ぞの兒物ひくるま弑つるまぬ今めるまみぐろふ警く外へも
洩しひなどいろよ秀俗ちち点灯微ぬくまろるひあけり。朝絵の君へさふゆも
いろぎど豊六夫婦が心操世の田夫山妻ゆ八又有めく兒とちの俗べー。さても要ろ兒
可答ふぞろぎど時弑根ー九重九元服ろ八式あるまて加冠理髪の人を擇ア唐
山ゆ八この日よると字さといふとあり。こぶ四ゆも亦名を定む和殿八ニ見らふまる
ひろるく世弑去のゆるるまぶ只速丈夫ようるく足なん小盟ま湯を沒てよ。
いで別ぞ兒進せんといろく躰く立あぶるまく棚の隅ようを砥を取おろ剃刀を
合せるどもれば阿三郎八坐と白て額髪弑搔出ー。推濡しくまん沿ふ秀俗八後ま

立くまぶるかこと弑剃ふ兒髪結果くゆ弑拭ひ前ふついるくどんひりぞ遺丈夫ふ
るるまふけ是愛さくくと祝をまぶ阿三郎八盟の酒とり人頼さ〜兒てうーんて茶
去く恩弑謝ー既ま脇弑改さんどもいまぐ名弑更ゆまど所とろ名告いんと問ふ秀作
洗吟ぶ実父の木曾八憚ある。和田をりく苗字とせん狩三浦をりて苗字とせん狩
みぶうう撰ぶひ弦といふまく雲時弑傾け要ぶれー分の勘乳ゆるま必親乃
苗字を續んと嗚呼ふる恋ゆ八どや安房ゆく人ようるまぶ兒ぶて郡の名と
取く朝夷を苗字とせん狩某彼処を去くるま兒縄くけの不動ゆ祈念ーくり
一郡の主ともるるぶ八ふうしく。この地を領せん。さるま兒八ぶひの隨ま堂宇を
修覆ー苗字らんと誓ひーるもゆ必ぶ此彼りんめんく朝夷と唱ゆるーくぶふちりり今
愚意弑りく定ん丈実父八義仲養父八義盛共ま諱ふ義の字あるまゆ必ぶ
竊ま一字を表くく。朝夷三郎義秀と名告ひどやとふ秀俗ゆくうちを美。

そゝ一段ものゝべし秀の字よ味ひあるに才秀ざれば力を立ぬよりうく運秀ざれば
遂ゝ人ゝ武ハ勇の就る而。言も武ハ武ハ後つゝ古又も武ハ わらざれば
武秀れば名も又秀ゞ名秀れハ人服をこゝ武豪傑勇士といふこゝ武択れば
武秀の二字究めく愛さゝ又朝夷ハ朝野よ臣上ハ朝廷下ハ草野異域夷狄の
ゝ師の賞美甚思さゝ秀の字ハ師の字を象ものゝ ふいと口顔よ鎌遜ゝく
さこゝの日よゝ朝夷義秀と名告ゝ又秀徳ハ安房上総ゝ月毎よ
乾魚賣ハ商旅よ大儲のる武何よ脆堀ゞ鎌倉へ出てく則領主御耐五
郎満禄信俊ゝ彼地よ下向ゝく荘司村長里人ハを召集合顔末尚邪
正を質ゝ理非を判断ゝ脆堀ハ手本の奸曲をゝく露顕せるゝ
ゝ豊ハ妻ハさゝ阿三郎武追捕の沙汰ゝ渠その弟武守へ流ゞ

私ハ意趣を演く眼代を殺ゝる外よ民数帳の名簿を削ゝり立ゝくハ推ゝ
置ゝ速よゝ丹ゝて村長ハ武ゝ武ゝ緯ゝ異よおさゝりぬとゝ精細よ
物ゝゝゝ秀徳窃よ殺ゝく脆ゝ件の趣を武秀ハ告ゝ武ゝ世武憚ゝ
人ハを達せゝどゝれども田舎ハ言ハ敵ゝ明ても暮ても師才両人ゝゝ兵書を
講ゝく古人の得失を討論ゝ又ゝゝハ太力を合せ的を射ゝ月日を送る
程ハ年暮て春のゝゝ紅梅ゝゝ衣更ゝの上洗よゝゝハけり。ゝゝ武ハ
御気再発ゝく病苦ハ治ゝ。ゝも危くゝゝ武秀ハ武ゝ憂ひて良医を
募ゝ薬餌をゝゝ看病ゝ雨ゝゝ功験ゝゝゝゝ
世ハ憑ゝゝく出ひゝん右一日ゝゝゝ頭顱を揉ゝく武秀ハ人ハ
ゝ上怨よゝゝゝ又安房よ在り日ゝ弟子ハゝゝゝ皮武伝て骨を
ゝどゝ皮骨を伝ゝ和歌只一人ゝれども今ハ絶の許我ゝゝ陽終水武

取せんといひつゝやく思ひかけざりしに過世の恩義を。愚老は今茲六十八歳妻は先だち子もなければ惜しくもあらぬ齢なるにいかまでか世を貪るべき死なんとす。和殿又この地にあらば留るべからず。下野国足利なる学校の学頭均長老は安達盛長ぬしの子なりし。治承の年間古主に従ひ鎌倉へ来りしより一面の識あり。今に至りて年あまた絶て音問せざれども彼長老は儒仏の碩学にて其性温順にして容を愛せり。和殿武藝は熟きといへども文道はいまだ足ざれば款且く彼処に身を寓て学びて禄をもとめたまへ。彼足利なる学校は参議小野篁朝臣さきに建てしとかいふ。篁は永見の孫岑守の子なりし。弘仁十三年文章生となりて天長元年巡察使弾正たり。頻に進て参議に叙れき。時の博物宏才なり。世のひと文殊の化身といふ。篁巡察使たりし時奏して州毎に学校を造営し孔氏并に十哲の像を置て春秋にまつりて祀り。諸生をあつめて学ばしむ。世くだりて

学校廃れて下野にのみ遺れるのみ。明堂を守るの儒生いと乏くなりしかば法師を入れて兼学させし則とはなりしなり。近ろ足利義兼ぬし堂社を再興せられて明堂昔に立かへり繁昌せるよし。然れば今和殿の才をもて猶亦彼処に勤学せば文武両ながら成就して遂に志願を遂んこと絶て疑ひなかるものなるをも。今の世の人ちかき矣の中に刃を隠せば身の慎こそ肝要なれ時運に稱ひ。撰にあたりて重用せらるゝことあらんとも君の寵もたのむべからず。こゝろに績を誇るべからず。功成名遂て退くは後に必悔ることあり。譬ば古主上総介広常の如き鎌倉創業の功臣なりしかども讒者のために弾れて忽地殺されしにけり。かくて故殿広常亡びし此上総国一宮の神主兼重は鎌倉殿へ申して云故広常存生の時宿願の旨ありとて納め置し甲一領今なほ宝殿にこれ有と下祢宜をもて訴しかば頼朝卿訝りたまひて藤判官代邦通と一品坊を遣して件の甲をとりよせて

御覧ぜらるゝに高紙に結付さる一封の書状あり。披くに商主なる鎌倉殿のおんさゝやに武運祈る願書入祈願の廷真成は三个條式書載て治暦六年七月日上総權介平朝臣廣常と自筆をのゝく写せり。ぐうち驚せるのひつ原来廣常逆心をのゝまた悔くも疑ひ深せりとよと愧らひのひく。故殿の舎弟天羽庄司直胤ぬ相馬九郎常清ぬに縁坐よりまく。囚人となりさる式召出しく厚免せらるべ況より式郎座に仰下さるとさるとは思はれ寿永三年正月十七日のゝ日なんこの後建久四年の秋浦殿縄に頼に死を賜しとも出後悔あるとと狩野四郎疑の人をあまんと醫師が病症を診損じく人を殺さるとは酷し名将をとゝいくの如し暗君庸主はさぞあらん。功名の下ゆに久しく居べからぬとて大夫文種を誅やらるる范蠡が辭たるとゝかふさぞや。生涯さる懸念しく終り式慎をのひねと叮嚀に教訓し病苦を忍びく均長老へ紹介の書状を写めとる式朝夷に遠ゆせしく義秀に感謝に悔さと遠しく扶助さて。

真成に首病をゆくく又五六日を経ゆに秀化いくく衰くに終にむなしくなりぬ。義秀は哀悼して親を喪く心地とあれどさてあるべきるあらざるとて里人式相潭ひて。許我より程も遠からぬ真中の野寺今の間中と書許我を葬まつ初七日果く次の日ゆ。秀作の衣裳はさらるるとて家式さへ売くてぞく香華の料に寺へ布施しとて式半銭も貯へを里人に別れ式告つ足利式投く起行せる時は弥生のそゞめゆく。山は翠ゆいろくの花綻びく霞ふく。水は皺してさゞくの鳥囀りて風暖く。行人も馬上に睡りて農夫は畝に憩ひ家ゆに種を浸しゆに果式摘む人のさらるの長閑くく旅かりて死ぬるとゞも親のゝ。ゞ程方ぞひるとて楽くもあらぬ歌ゆうて。待ゆも賦も名所古蹟よりとまゝで日ゆ歩き夜に宿りて辛きく下野なる足利に来ゆけるに学校に赴くく。均長老を尋ねに彼長老は迂化してそやこ年ゆうるとのゆに武秀は又さらるゆまゝゆ式失ひくいふせはとぞひるびつ。ゆゆ委細に尋ねび留学の緒生ゆ答く

只今の学問は真言密宗の碩学なる。理真上人ゆくゆくまた。鈴長老の
親族い婦倉ゆてそあるとなけ。おらゆれさ居人もるー。毒細ー紙考らんと
るゆ字吉見といふ地方ゆ殺者義邦といふ郷士あるとい長老の才子ゆく。
舊縁あるよーゆそそり。其紙よいゆ紙考ると書うゆ道乃
稽ゆめ此ゆと叮嚀ま示せーゆ義秀はその人ゆ欲ーゆよ紙述ゆ吉見の
ゆ人赴ゆ。そとまつゆくゆ平。鈴長老ゆくゆそそゆ由縁の人といふ
とも先師の紹介絡ゆゆ似ゆ。さとゆとゆ今夏ま投ゆくいゆん紙とな。
且紙ま彼郷士を誘ゆや。とゆくーゆ件の緒生ゆ海ー隨ま義邦の宿所を尋て。
外面よりま瞻仰ゆま。衡門紙真中ゆまとゆゆ。左右へ竹邑締繞ゆ居一構乃宅
地ゆまま進ゆ入ゆゆ又ゆゆゆ垣の内ゆい部穀藏あり。柴小屋あり。奥ゆて書院と
ゆゆ紙。客居とゆゆ紙茅葺ゆ造ゆさゆ田舎ゆそいと愛ゆ。

門ゆ小厠ゆゆ。雅と沙ゆ義秀云云のゆ紙告居ま小厠ゆゆ主人ゆ友ゆ
猪引ま今朝未明ゆま大石山へ翔ゆ紙射ゆゆ暮ま沙ゆ選ゆべゆもゆゆ。
ゆ對面せんとゆゆ翌又朱ゆゆとゆゆ義秀ゆゆ。原来幸ゆ一又義ゆゆとゆゆ
ゆゆゆ外面へ退紙ゆゆ門辺ま立ゆ。空ゆゆ日ゆゆ阜紙ま翌と契ゆゆ外ま
宿を求ゆゆまゆ面彼紙ゆ拔ゆ山せゆ義邦ゆあゆゆあゆん。さゆとゆ道紙人ゆ
問ゆ大石山へ赴紙ゆ。麓の小舍ま火縄を購ゆ。おゆつゆなゆもゆけ入居ゆ二ゆ當
國の高峯なり羊陽ゆ山又山樵夫炭焼ゆゆ通ゆ路ゆ。條もあゆゆ迷ゆれゆ。
何紙ゆゆゆ彼人ゆあゆべーとゆゆゆゆゆゆゆ。ゆゆゆ勉ゆ登居紙ゆゆいと坦ゆる紙ま
来ゆ。この四辺芙生ゆゆ。左ゆ小岡あゆゆ。小松茂ゆ。岡の辺ま撓捨ゆ居ゆゆる
灰ゆゆゆま居ゆ傍の松ま滋藤の弓を倚ゆ。その下ゆ箙矢一條ありゆゆゆ取揚て
ゆゆ紙ゆゆゆゆゆゆゆ。ゆゆゆ必彼輩ゆ遺ゆゆ居ゆゆゆゆ

大石山
義秀
射る
刀野ノ太郎時夏
ノ三三賀光

朝ひるのよし秀

あらん燒捨たる火ハさらなり。この弓箭ハ推量なるに相去る上とおもふべし。
初對面の牽出物なりと又ある紙射て心の憂を慰ん。とおもふにぞこの弓箭
を挾て梢を向上て徘徊せしほどに又吉見對者義邦ハ年來陵て世られたる。
筠長老なくなりても文武の学問懈らずとて只学校へいそがしく會読詩作
なども一ツもおこたらず。刀野太郎時夏と勝れずおもひしに屈くなりてそれ
と由渠が亡父照時は母君幡太の方へ離れおもふと灰は悦べけれども。たゞうち解
たる氣色ハなくして遠離んとのミおもふのミなる生憎に時夏と稽古の日を
共にせしが困じ果ていつとなく学校へ赴かずなりぬ。廣光これを訝りてその懈を
禮しが義邦ハ稗の熟如此ことと告ぬれバ廣光又これを諫めて。刀野ハ淳浪人なれど
執権時政ぬしの所緣ありてさるにより當國の守義兼ぬしも等閑ならずとれを
扶持して客分と稱らる。さるに君がよろしからずハ強面もてはじめなバ彼人
必恨を含ん。云禍胎の讐ハその子に及ぶといふ本文あるにあらずや。いでその
交りをなすべしと叮嚀に諭しまうせしかバ義邦ハ有理とおもひしく又学校に交加つ。
時夏に會毎にさりげなくもてなしつゝ早晩友垣結びてこの日大石山の小鳥狩に
誘ひ出されしあひにくなるに義邦ハけふの狩山の獵帽をかぶりて路
なけれバ從者のみ宿の惟光なる江三二に弓箭をもたして小廝に割籠を扛擔せ
未明より出たちぬ。かくてしバ時夏ハ懷刀行縢弓箭までいと華やかなる扮
扮して。烏帽子井平といふ若黨に替弓を持せて。奴隷四五人列卒十人猟前に
立し後に從へ義邦と推並て件の山に赴きぬ。彼首に立て彼れは求獲るにさる獲ハ
おほかたくく日へもや斜なるまでいけり時夏素より賭を好めバ誘て義邦に約さる
やうこの和君に先たちくよきる鳥射て落さバ布十疋を牽てまゐらせん和君の一先
たちてよきる鳥射て落しなバ布十疋進せん。このうち違乱あるべからずと誘てやま

定ゝぶ弟邦貪るまろろるまで立心さるのまとまてるの弓ゝ此三ゝ懸念去るるね尼時
夏ハいふびひろくくこれハ射ゝ射ゝと射る毎ゝ化箭のまゆく物弦獲ゞ却若嘗廿
平ゝ山鳩二三度射さるまゝゝゝ時夏ゝまく焦燥く。この箭ハまろ〻ゝ〻ゝ〻ゝ
科弦弓箭ゝ負せつゝ弓ゝ脊弦弦ゝ。彼此とちく徘徊せまゝ浩然ゝ野雞
一度列率ゝ追まく叢ゝまゝ。ゝゝと立ゝゝ。まゝゝと矢ゝまゝ搔搖ゝ時夏美
邦推並くゝ引固て彈ゞ射る。ゝまゝまゝゝ射ゝ中ゝゝ時
夏羞て必恨ゝ攘ゝゝ。とおゞせゝゝ寛ゝ外ゝゝひまゝく時夏ゝ。
射る前ハいく翦ゝく翦ゝゝゝゝ間ゝまゝまゝゝ野雞ハたちまち地ゝ落たまゝ衆
皆ゝゝと誉散動ゝく。ゝゝゝと仲の野雞を引捕くゝゝゝ時夏ゝ遠
ゝく。鳥ゝまゝゝ箭弦。ゝゝゝゝて満面ゝ笑弦含ゝ吉見生ゝまゝゝ賭ゝ
某勝ゝゝゝ矢柄ゝゝゝ弦紀ゝくまゝゝ紛ゝゝゝゝゝゝゝ。

彎貞ゝ箭弦抜ゝゝゝと。ゝ弦ゝ前面の射後ゝまゝ声高く且くその箭を抜ゝまゝ
ゝゝ野雞のゆゝゝとゝあまゝと禁ゝく拇間を射る人ゝまゝ皆ゝゝゝ弦ゝ。
その人身長六尺ゝまゝまゝ眼ハ清く眉秀筋骨逞ゝゝ。
まゝゝ人品骨相賢ゝゝ。ゝ榜の甲掛脚半ゝ両刀を腰ゝ帯ゝゝ滋藤の弓ゝゝ。
この人ハ別人ゝゝ朝夷三郎義秀ゝまゝ畢竟義秀ゝゝゝ会ゝく人ゝゝ
物語ゝゝ。そハ巻ゝ更條を改め第二輯の首ゝゝゝなん抑義秀の伯初中後ゝまゝ
その嶋めぐりゝゝ至ゝゝ物ゝゝまゝ長ゝまゝ年弦積巻を。ゝゝ。ゝゝく剖剛氏を
労まゝゝあらざるゝ全本となゝゝ璧ハ曩篇弓弦月又今茲著せゝ八犬
士傳の類なゝまゝ敢請四方の看官ゝを結ぶのまゝゝ倦ゝゝゝまゝゝ毎ゝ嗣出
ゝ弦倦ゝく高評弦ゝく。

朝夷巡島記 全傳 巻之五 終

編述 曲亭馬琴稿本

浄書 荏土 千形仲道謄寫

出像 一柳齋豐廣畫

剞劂 華洛 井上治兵衛刀

筆 福禍壽大吉利市

文化十二年乙亥

繡梓書肆 春正月吉日發販

○曲亭新編繪入草紙物かたり目録 浪華 文金堂藏板

この書ハ本房の飛板鎌倉九代記嶺倉実記鎌倉新治ホとべく朝夷の事迹ある紙元らと刊行をとのべとも事ハ俗者の新題向ホ出ふく聊ホかつ所のく新ヨ編るものホなん 第二編近日嗣出ス

朝夷巡嶋記 初輯五巻 外行 豊廣画 第二輯五巻嗣出

南総里見八犬傳 肇編五巻 柳川画 二編三編引つゞき発出ス

月氷奇縁 全入ト巻ホ 全五冊

新累解脱物語 右ハ同北齋画 全五冊

昔語質屋庫 右書俗語のあるより紙正ふく ひとをふく奥じゝる草紙ヲ 全五冊

松染情史秋七草 全入ト巻ホ 豊廣画 全五冊

燕石雑志 隨筆ものゝ古書を引まるゝと正ふくみつゝの考をのせす 全五冊

俳諧歳時記 云ふよりせの再注ハとの書ホ 全二冊

○馬琴画賛扇 并ニ神女湯まゐり九つ狐出の妙笑ホ私ハ世ゆく とゝ次ハ扇ハ江戸神田ゑび町柏屋ホ売くゆもあり

拙舗累年書籍ヲ鬻キ近來都鄙一般書房ト弘通ス且ツ諸
府縣廳或ハ諸先生ノ御藏版アル毎ニ幾兒ヲ命セラル故ニ新板
圖書ハ積テ以テ洩スコトナシ加フルニ和漢洋ノ書冊ハ今古ヲ不論
亦以テ備ヘ置ケリ仰冀ハ書ヲ購フノ君子其多寡ニ嫌ナク弊店ニ
就テ御買得アランコヲ

文榮閣主人謹白

製本處

前川源七郎

大坂府下心齋橋筋
北久寶寺町卅九番地

早稲田大学図書館
011888007204